研修報告　歴史分科会高大連携講座

第８回　「近世のアジアをどのように学ぶか」

中央大学付属横浜中学校・高等学校　　**柴　泰登**
栄光学園高校　**福本　淳**　　横浜明朋高校　　**鈴木　健司**

歴史分科会のこの試みもついに 8 回目を数えた。2011 年度よりは，神奈川歴史教育研究会を共催団体とし，内容はさらに充実したものとなっている。2015 年度は 8 月 3 日(月)から 5 日(水)までの 3 日間, 鎌倉学園高校星月ホールで行われた。3 日間の参加者は生徒・教員をあわせて延べ 300 名となり，これまでの最大人数となった。2015 年度は,「近世のアジアをどのように学ぶか」をテーマとして，午前は生徒への授業，午後は参観教員との研究協議という例年と同様の形式で行われた。近世のアジアの捉え方とその教材化のあり方等をめぐって連日活発な議論が交わされ，大変有意義な研修となった。

〈1 日目〉

「近世」の東南アジア　黒崎洋介（湘南台高校）

まず，生徒たちに東南アジアのイメージを問うた。その中で,「島」「仏教」「植民地」「混沌」などというイメージが浮かび上がってきた。

次に，アクティブラーニング形式で東南アジアの大きな流れを「まず」「つぎに」「さいごに」という 3 つに分けて示し，15 世紀以前と 15 世紀以後，さらに第二次世界大戦後に時代を区分して東南アジアの時代区分を行うことを行った。そのうえで，東南アジアの地図を半島・河川・島・海峡・11 の国名・宗教・どこから独立したかに注目して生徒に書かせた。そして，東南アジアは大きく分けて大陸部と島嶼部と呼ばれる地域に分けられることを教授した。ここまでの作業は，いずれも生徒になじみの薄い東南アジアの歴史を理解するうえでの準備となるものであった。

本題では，まず 15 世紀以前の東南アジアについて講義した。ここでは，中国とインドが東南アジアに与えた影響や東南アジアの交易ルートの変遷, 元朝のフビライの侵入による影響について触れた。さらに今回のメインの話題となる 15 世紀以降の東南アジアについては，交易の時代を迎えた東南アジアがイスラーム化すること，その後にヨーロッパ勢力も参入して現在の宗教分布が確立することが述べられた。

近世の東南アジア世界　桃木至朗（大阪大学）

まず,「わかりにくい」東南アジア史を克服する方法は，王朝名や人名の羅列ではなく大きな構図を理解すること，東南アジアの場合は「ヨコ」から歴史を見てみることが大切である。また，日本との関係や日本と似ている点は無いか，日本に関係ないと思わず関心を抱くことも重要である。

そういった視点を提示して，実際に大きな構図を示したい。まず，近世前期は大航海時代（第二次大交易時代）である。この時代には交易国家であるマラッカ王国が繁栄し，ヨーロッパ人の到来も始まった。そうしたなかで，中国人や日本人との競合も起こった。近世後期においては，まず島嶼部への外部勢力（オランダ・スペイン）の進出が始まり，商品作物の強制的生産が行われた。また，この時期の後半には移民・出稼ぎが増加を続けている。さらに近世前期までの国家が衰退した結果，後の独立運動が「失われた王国の復興」という形になり難かった。一方で，コンバウン朝ビルマ，ラタナコーシン朝シャム，阮朝越南という大国家が成立していた大陸部では，対照的に「もとあった国家の

復興を目指す」ことが可能であった。この時期における東南アジアの支配の段階的変化は，16～17世紀の拠点と貿易ルートのみの支配から，18～19 世紀における面としての支配の開始，19 世紀末～20 世紀前半の植民地支配の本格化と次第に「大きな政府」となっている点が特徴である。

こうした大きな構図から，西山（タイソン）戦争を見たとき，この戦争は世界戦争と考えることができる。「パリ外国宣教会」ピニョーによる阮福暎への支援だけでなく，阮福暎はマカオやゴアのポルトガル人に救援を求めている事実がある。またラタナコーシン朝は阮福暎を支援して西山勢力を倒そうとした。また西山朝は，広東省で暴れ回っていた中国人海賊集団（一部はベトナム人）と結託していたため，清朝に冷たい態度を取られた。このように，西山（タイソン）戦争にはヨーロッパ勢力や周辺勢力を巻き込んだ世界戦争だったのである。　（文責　中央大学付属横浜高等学校　　柴泰登）

〈２日目〉

オスマン帝国の成立　　智野　豊彦（横浜市立みなと総合高校）

オスマン帝国は，上の世代には「オスマン＝トルコ」という名でなじみ深い。トルコ系遊牧民はもともとモンゴル高原にいた。彼らは 6 世紀の突厥，8 世紀のウイグルと呼ばれた時代を経て，9 世紀には中央アジアに移動し，イスラームが浸透するとともにその地は「トルキスタン」と呼ばれるようになった。騎馬に巧みなトルコ人はマムルークとしてイスラーム世界に進出し，11 世紀にはイラン高原におこったセルジュク朝がビザンツ帝国を破った。そこから内紛で分裂したルーム＝セルジュク朝はアナトリア半島をイスラーム化していくが，1243 年に侵入してきたモンゴルの属国とされる。以後アナトリアは，イスラーム系のガーズィー（戦士）やベイリク（君侯），キリスト教系のアクリタイ（戦士）による群雄割拠となった。

1299 年にトルコ系オグズ族を率いたオスマン＝ベイが，他のベイリクと抗争しながら自立した。これをオスマン朝の建国としているが，実質は 2 代目のオルハンによるブルサ占領（1326 年）によって戦士集団から国家へ変貌したと言えるだろう。3 代目のムラト 1 世はバルカン半島に遠征し，アドリアノープルを占領して遷都した。常備歩兵軍やイェニチェリを創設するなど，辺境の君侯国から小帝国となっていくのがこの頃である。4 代目のバヤズィット 1 世はニコポリスでジギスムントを破る（1396 年）など征服領域を広げたが，敵対するアナトリアのベイリクから救援要請を受けて来襲したティムールにアンカラで敗北（1402 年）し，支配体制は一時崩壊した。この好機をビザンツ帝国は十分に生かせず，やがて勢力を回復させたオスマン朝は 7 代目のメフメト 2 世のときにコンスタンティノープルを占領してこれを滅ぼした。堅固な城壁と金角湾に守られた要害をおとすため，艦隊を山越えさせて湾に侵入させたという戦史に残る奇想天外な作戦は，つとに有名である。

その後の都市名として教科書や資料集では「イスタンブル」と表記されることが多いが，公式には「コンスタンティニエ」と呼ばれた。「イスタンブル」も徐々に使われるようになっていくが，それが正式名称となるのはトルコ共和国になってからである。またメフメト 2 世は「ルネサンスのパトロン」としての側面もあり，オスマン朝やサファヴィー朝では多くの肖像画が描かれている。偶像崇拝禁止の教えから肖像画が発達しなかったと言われるイスラーム世界だが，単純化した通説は必ずしも正しいわけではない事例として知っておいて欲しい。

オスマン帝国は「トルコの国」ではない。多言語社会であって，他宗教と共存する社会であったことは重要である。異教徒はミッレトとよばれる共同体に組織され，商工業に携わった。16 世紀は，オスマン帝国，サファヴィー朝，ムガル帝国という 3 王朝が並び立つ，イスラームの黄金時代であったと言えるだろう。

「近世」の西アジア　　長谷部　圭彦（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

オスマン帝国の「近世」は，教科書ではあまり触れられることはない。この時代は，16 世紀のスレイマン 1 世による最盛期と，18 世紀末からの西洋化改革期の間にはさまれた時代だが，敗戦が目立ち始め，地方分権化が進んだことから，衰退のイメージで語られることが多い。西洋化改革期を「持ち直した時代」と評価する向きから，狭間の期間は衰退の時代としたほうが都合がよいという事情も影響していると思われる。他方，オスマン帝国の支配領域が最大になったのは 17 世紀後半の第二次ウィーン包囲直前の時期である。だからといって，この時期を「最盛期」と言うことはないわけであるが，近年，衰退ばかりでもないという研究動向もあらわれている。

スレイマン没後のオスマン帝国では，ヴェネツィア・ハプスブルク家・サファヴィー朝との抗争が続いていた。ヴェネツィアはレパントの海戦で勝利をおさめたが，オスマン艦隊の再建が早期に行われたため，キプロスの割譲を認めて和議を結んだ。サファヴィー朝ではチャルディランの敗北以後，火砲の導入が進んだ。アッバース 1 世の軍事的成功もあって，オスマンとの戦いは長期化したが，17 世紀前半にようやく和議が結ばれた。ハプスブルク家への対抗上，他のヨーロッパ諸国にカピチュレーションを与えているのもこの頃であるが，戦費が増大し，物価も上昇したことで財政赤字が膨らんだ。帝国領の拡大が止まるとティマール制（イクター制）の意義が失われていき，また火砲が登場して戦術が変化すると，騎兵（スィパーヒー）の重要性は低下したため，これに変わる新たな徴税制度が必要になった。そして火砲を扱う常備歩兵軍として，イェニチェリの拡充や質的変化が求められ，そのための新たな財源も必要となった。そこで用いられたのが，徴税請負制（イルティザーム）である。徴税権は競売にかけられ，大都市の官僚や軍人，ウラマーが落札した。落札者は納税額の一部を前払いで国庫に納付するため，税収は増大した。しかし請負期間は 1～3 年とされていたため，徴収は過酷になっていき，実際に徴税に当たった現地の有力者は地方名士（アーヤーン）となっていった。

一方 16 世紀後半から 17 世紀にかけて，アナトリアでは中・下級の軍人が農民や非正規兵と結託した反乱（ジェラーリー諸反乱）が頻発した。後宮では 14 代アフメト 1 世の妃キョセムと 18 代イブラヒムの妃トゥルハンの抗争など，スルタンの母后たちが権勢をふるって政治が混乱した。1656 年にはヴェネツィアによるダーダネルス海峡封鎖事件が勃発したが，トゥルハンによって大宰相に抜擢されたキョプリュリュ・メフメト・パシャが事態を収拾した。死後は息子が大宰相となり，帝国領を最大にするなど，国勢の立て直しに尽力した（キョプリュリュ時代）。また女婿も大宰相となるが，第二次ウィーン包囲失敗を機に処刑されている。その後の帝国はヨーロッパ諸国軍への敗北が続き，1699 年のカルロヴィッツ条約でハンガリー，トランシルヴァニアなどを喪失した。

こうした軍事的後退から，帝国は対外的に宥和政策をとるようになり，外交の担い手として大宰相府の書記官長とそれを支える書記層の重要性が高まった。23 代アフメト 3 世の大宰相ネヴシェヒルリ・イブラヒム・パシャは，初の海外使節派遣（パリ）を行い，西欧技術や文化を導入して，アラビア文字の活版印刷所も設立された。この束の間の平和な時代を，流行した花の名をとって「チューリップ時代（1718～30）」と呼んでいる。他方，徴税請負の期間制の弊害が顕著になると，これを終身制にする改革が行われたが，力をつけたアーヤーンは，官職を獲得し，大農場を経営して私兵を蓄え台頭した。しかし露土戦争（1768～74）で帝国が敗北すると，キュチュク・カイナルジャ条約によって，黒海北岸（クリム・ハン国の宗主権）を失い，ロシア商船の黒海およびボスポラス・ダーダネルス両海峡の通行権を認めた。その後の露土戦争（1787～91）でクリミア半島はロシアに領有され，改革の必要性を痛感したセリム 3 世は，1793 年より軍隊の西洋化を計画していくことになる。

オスマン帝国の「近世」はいわゆる衰退論だけでは片付けられない。徴税請負制の導入，アーヤー

ンの台頭，大宰相府の成立と書記層の形成といった，スレイマン期とは異なる後期支配体制が確立された時代であると言ってよいだろう。　（文責　横浜明朋高等学校　鈴木健司）

〈3 日目〉

近世の東アジア世界　大久保敏朗（県立城郷高等学校）

明朝は紅巾の乱の一部将だった朱元璋が勝ち上がって建てた王朝である。その背景には 14 世紀における気候の世界的な寒冷化があったと思われる。明は元朝から民衆支配のノウハウ（千戸制を参考にしたと思われる里甲制）などを引き継ぐ反面，儒教的な民衆教化の方法である六諭や，精密な土地台帳にもとづく農村収奪など独自の政策も追求した，また前期倭寇に悩まされつつ民間貿易を禁止して，海外交易を朝貢に限定し，朝貢国増加のキャンペーンとして鄭和を南海・西方に派遣するなど，独自の対外政策をも追求した。16 世紀に入ると明の厳格な海禁政策は緩み，密貿易が活性化して後期倭寇が猛威をふるった。こうした圧迫に苦しんだ明朝は国力を消耗し，やがて清朝の時代が到来する。

近世の東アジア世界　杉山清彦（東京大学）

朝貢・冊封体制は唐代と明代に特に顕著に表れたとされるが，唐代においては軍事的に脅威である西方・北方諸民族には柔軟な外交政策がとられ，強大とはいえない日本や朝鮮には比較的厳格な序列が適用されるなど当時の世界情勢を反映したものであった。明代もまた，漢民族を頂点とする国際秩序を意気揚々と指向したというよりは，元代の通商網は寸断され，また卑賤な農民反乱上がりの政権ということで儒教エリート層からは相手にされず，海岸地域で前期倭寇が暴れ回るという危機的な孤立状態の中で，第一に農村収奪を徹底して財政を固めるいっぽうで，明の威信を高め，また海上交通を安定化させつつ貿易を行うという緊急避難の性格が濃い。鄭和が南海諸国に，またその他でも懐良親王や足利義満にわざわざ朝貢をしませんかと誘いをかけるという，朝貢の理想からすれば異様な事態もこのような文脈で理解される。このような体制に武装しつつ新規参入を図ったのが後期倭寇である。明の政策の弛緩とともに東アジアは国家のメンツがからんで難しい朝貢貿易から，民間主導の互市貿易が中心となっていく。こうした 16 世紀後期の経済の新たな活性化のなかで成長したのが，女真人・海洋軍閥としての鄭一族・日本などであった。彼らが中心となり 17～19 世紀の東アジア国際秩序が生まれていく。　（文責　栄光学園高校　福本　淳）

午前１　高校教員の授業（アクティブラーニングを取り入れた授業もありました。）

午前２　大学教員の授業（高校生が熱心に聞き入っています。）

午後　教員の研究協議（例年あっという間に時間がなくなります。）

３日目　会場（建長寺）見学会（ここは普段は入れません。ありがとうございました。）